



Title	“人類の救世主チーム” に感謝
Author(s)	北岡, 千夏
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2020, 21, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/83271">https://doi.org/10.18910/83271</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## “人類の救世主チーム”に感謝

北岡 千夏（大阪大学 非常勤講師）

### 1. はじめに

遠隔授業の3ヶ月が終わった。いつもとは全く違った環境であったにもかかわらず、学生たちは“いつもと同じ”だった。私は、大阪大学では、マルチリンガル教育センターと外国語学部でロシア語を担当している。マルチリンガル教育センター1年生のクラスでは、初めてふれる外国語に新鮮な気持ちで取り組む真摯な姿勢が画面越しにも伝わってきた。一方でモチベーションの維持が難しい2年生のクラスでは、一部の学生の適当さを感じ取れた。外国語学部でも、ニュースなどのリスニングや通訳練習をするクラスでは学生たちが画面の向こうで懸命に音声を聞きシャドーイングをする姿が見られ、少しゆるめのクラスの学生たちはそれぞれの個性をみせながら授業に参加していた。

4月、メディア授業ってどんなことができるのだろうかという不安と、状況が違ってても学生たちに相応のものを提供したいという思いが混じっての遠隔授業のスタートであった。

3ヶ月が過ぎ、どの教師もその経験を語るのには紙面を何ページ与えられても尽きないのではないかと思うほどの多くの新しい経験をしたと思う。私は、大阪大学以外にも関西大学、同志社大学で合わせて12コマの授業を担当し300名ほどの学生をZoom越しに見てきた。その中から、遠隔授業によってより学習効果が期待できる授業が可能なのではないかと感じた大阪大学外国語学部3,4年生の授業実践を紹介したい。

### 2. 授業実践例

外国語学部3,4年生向け演習のロシア語Ⅲaのクラスは、ラジオやテレビのニュースを素材にした聞き取り練習とスピーチやインタビューの素材を使っ

ての通訳練習をしている。毎年15人前後の受講生で、語学の授業としては理想的なクラスサイズである。今年も3年生11名、4年生5名の計16名の受講生で授業を進めた。

教室での授業の場合、学生たちは備え付けのテレビのスピーカーから流れるニュース音声を聞き取り、訳し、穴埋めなどの問題を解く。教材がスピーチやインタビューでも同様で、まず聞き取れた内容のチェックをし、音声とテキストを持ち帰り、家で訳し、翌週に通訳を試してみる。学生のレベルによっては同時通訳を試みることもある。この一連の流れを今年Zoom&ロイロノート・スクール<sup>1</sup>ですることになったわけだが、教室での経験のままに授業を進めようとしても上手くはいかなかった。

最初の授業でZoomの画面共有を使ってロイロノート・スクールから音を流したところで、音が跳んで聞き取れないという声が複数の学生からあった。全体で聞く必要はないのだから、ロイロノート・スクールの「送る」機能で音を学生に送って手元で聞いてもらうことにした。

教室では、スピーカーから音声を流して「まずは全体としてわかったことを言ってみて」と声をかけると、大概是誰かがざっくりと聞き取れたことを言ってくれるのだが、Zoomの講義ではどこからも声が上がらない。

“声を出すタイミングがわからない”という学生の声があった。場を共にしているはずの人の気配が感じられないと口を開きにくいようで、何か話しやすい環境を作る工夫が必要だと感じたが、上手い解決策がみつからなかった。

そこで、聞き取れたことをそれぞれに書いて「提出箱」に入れてもらうことにした。(図1)

<sup>1</sup> <https://n.loilo.tv/ja/>



図1：ロイロノート・スクールの提出箱と学生の提出例

教室では、スピーカーから流れる音に合わせてシャドーイングをしていたが、これも Zoom の中ではせずに、授業時間外に各人で練習してテキストを読み上げた音声を提出してもらうことにした。

全体でする必要のないことをそぎ落とすと、“効率のよい授業”になった。聞き取りのスキルアップを目標とする場合、個々人のトレーニングを中心とした授業でよいので、学生の通信環境などがしっかり整えば、遠隔で十分に効果的な授業が可能であると考え。しかし、“効率のよい授業”になったところで何か足りないように感じた。なんだろう。例えば、教室で皆で声を合わせて数字の羅列を読む練習をすると、「この授業、筋トレみたいやな、疲れる」などと言われることもあったが、高揚感のようなものがあつたように思う。やはり、Zoom から聞こえる音に合わせて全員でシャドーイングをしよう。音が跳んで聞きにくくても皆で一緒に聞くことしよう。本来教室で行われるはずの授業が遠隔となったのだから、教室で学んでいる雰囲気を残したい。

### 3. Zoom の限界

どのクラスでも音とカメラの扱いには悩まされた。クラス全体で発音練習することができない。するにしても全員ミュートで練習するので、教師にとってはただ無音の時間であり、これにはなかなか慣れることができなかった。

4 月にはほぼすべての学生がカメラオン、いわゆ

る“顔出し”での授業だったが、日を追うごとに次第にカメラをオフにする学生が増えて行く。様々な理由からカメラオンには抵抗があるという学生の声を聞いた。顔写真や名前などの個人情報を守られないことを心配している声もあった。

実際に、授業中にシャッター音があったことがある。Zoom の画面を撮影してはいけないという話は最初の授業でしていたが、わからないように記録することはいくらでもできるだろう。

だからといって、音をミュートにしてカメラをオフにすると、視覚でも音でも人を感じない。感じるものがすべて奪われたらどうやって語学の授業ができるのだろう。学生たちにどう話しかけてよいかわからなくなる。顔が見えなければグループ活動もやりにくい。

これは、オンライン会議システムを授業で使用していることの限界であると思う。授業用の教育アプリには提出した画像や映像を教師にだけ表示できる機能がついていることがある。リアルタイムでも、教師にだけカメラの映像が表示されたり、教師の側から音量を調整したりできるような機能があれば良いのでは、と提案したい。

大学では教師が知識を伝え、学生が理解し思考を深めることが大切な講義形式の授業もあるが、語学の授業は双方向性が必要であり、毎回の授業が実習であるといっても良いだろう。教師と学生、学生と学生の間の声が聞こえる、顔が見える形のコミュニケーションが必須になってくる。

オンラインに適した授業とそうでない授業、それぞれに対応したシステムが必要ではないだろうか。今後も遠隔授業が世界中で続くならば、授業に特化したシステムができることを期待したい。

### 4. iPadcafe と教育アプリ

サイバーメディアセンターの岩居先生が主催する iPadcafe (iPad のアプリを授業に活用する方法を考える会) に初めて参加したのは 2018 年 3 月で、2018 年度には iPadcafe で教わったロイロノート・スクールを使って授業を試みた。学生に話す活動を提出してもらい簡単にチェックでき、授業内の活動をリ

アルタイムに回収できる。その機能の便利さに感動して以来、阪大の授業ではロイロノート・スクールを活用している。

しかし、他の非常勤先では使えないので、音声を集めるのに LMS を使ってみたが遠隔授業によりただでさえ 2 倍、3 倍に増えている仕事量に加えて LMS で提出ファイルを開くことに取りれる時間に、これではたまらないと iPadcafe で教えられながら使いこなせていなかった Flipgrid<sup>2</sup> (図 2) を使うことにした。これを導入して、対話やモノログの提出物を簡単にチェックすることができた。



図 2 : 7クラスで Flipgrid を使った

さらに、iPadcafe で紹介があったのに使っていなかった Bookwidgets<sup>3</sup> (図 3) にも挑戦し、教科書のテキストを練習問題化し授業外の課題とすることで、授業ではできるだけ学生間の関わりができるようなタスクを導入しようと考えることができた。



図 3 : Bookwidgets による練習問題の例

## 5. ZOOM+ $\alpha$ に感謝

コロナウイルスが広まり、海外での遠隔授業がニュースで取り上げられるようになった3月、日本でもこうなるに違いないと思った。パソコンで新しいことをするのは私のような年配者には難しい。授業が始まってからでは遅いと思い、パソコンを抱えてサイバーメディアセンターの大前先生のもとに走った。“Zoom って何？ 使い方教えて！”

その後、岩居先生の ZOOM+ $\alpha$ の相談会に2週間ほど毎日のように参加させていただき、講師仲間とも練習を重ねて授業の日を迎えた。授業が始まるころには Zoom は難なく使えるようになっていたが、授業の段取りを考えながら Zoom を操作するのは、Zoom だけを操作しているのとは違った難しさがあった。そこを支えてくれたのはロイロノート・スクールだった。ロイロノート・スクールには授業の段取りを仕込んでおけるので、次はどのファイルを提示するのか、どのタスクか、迷わずに進めることができる。必要なファイルを iPad から探しだすのにもたつくことがない。授業をしながら iPadcafe にはじめて参加した日のことが思い出され、すべてはこのためだったのかと、ロイロノート・スクールが難なく使いこなせるようになっていたことを有り難いと思った。授業が始まってからも、岩居先生の講習会に行くと授業で躓くその時その時の問題が解決され、大前先生の「こっそり相談会」や岩根先生の講習会でもさらに練習させていただいた。ZOOM+ $\alpha$ に参加した知り合いが、「人類の救世主だね」と言った。“人類の救世主チーム”のおかげで無事にこの3ヶ月を終えることができた。あれこれ書いたが、そのお礼を言いたいがためにこの原稿の執筆を引き受けた。ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

<sup>2</sup> <https://info.flipgrid.com>

<sup>3</sup> <https://www.bookwidgets.com>

<sup>4</sup> <https://zoom.les.cmc.osaka-u.ac.jp>